

## 編集後記

『演劇研究』第四十三号を今年度も無事お届けできるはこびとなった。

本号は、論考7編、資料紹介3編、研究ノート1編と、たいへん充実した内容となった。

これまで同様に日本の古典芸能から海外の現代演劇や映像作品、舞踊に至るまで、幅広い分野が網羅されており、本誌が目指してきた、演劇・映像・舞踏研究の発展への寄与という目的に十分に適う内容になっているといえる。

また、本誌第十六号より連載されている三村竹清日記研究会による「三村竹清日記不秋草堂日暦（二十八）」、および同第三十七号より連載されている、竹本幹夫前館長を中心とする『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享四年正月～六月分）は、貴重資料の紹介として、今や本誌を代表する稿と言えるだろう。

さらに、早稲田大学演劇映像学連携拠点における研究成果として、第三十九号より、連載されている「坪内逍遙宛諸家書簡5」

も当館が所蔵している資料を用いての調査研究プロジェクトの成果であり、継続して本誌に発表されていることは、演劇博物館が、まさに研究拠点として活発な研究活動を行ってきたという証ともいえる。

なお、今号には、演劇博物館に二〇〇七年に寄贈された小林悟氏旧蔵資料を基に、これまでほとんど研究対象とされていなかったマイナー・ジャンルの映画を、その製作過程を参照しつつ分析を行うという貴重な試みの論考が掲載されている。多様性を認め合う多文化共生に対して関心が高まっている中、「博物館・美術館」等の文化施設や社会教育施設のあり方にも繋がっていく研究と思われる、今後の研究の進展が期待されるところである。なお、二〇二〇年度に当館では春季企画展として、「Inside/Out—映像文化とJGBTQ+」を行う予定である。こちらも期待してもらいたい。

最後に本号刊行にあたり、ご多忙のなか、編集委員を務めていただいた先生方、また、短期間にもかかわらず、査読・再査読をお引き受けいただいた先生方に、この場を借りて、心からお礼を申しあげたい。

（岡室美奈子）

令和二年三月十一日 印刷  
令和二年三月二十三日 発行

## 演劇研究 第四十三号

編集兼  
発行者 岡室美奈子

印刷所 株式会社 研恒社

東京都千代田区九段北一―一七  
カーサ九段2F

発行所 早稲田大学

坪内博士記念演劇博物館